京都帝國大學經濟學會

# 經濟論叢

第十四卷　第二號

大正十一年二月一日發行

論叢

最低生活費免稅論・・・・・・・・・・法學博士　小川鄉太郎

植民政策是非・・・・・・・・・・文學博士　原勝郎

小作制と小作法・・・・・・・・・・法學博士　河田嗣郎

經濟道と經濟術・・・・・・・・・・法學士　作田莊一

海運に於ける競爭と獨占・・・・・・・・・・法學士　小島昌太郎

時論

我邦消費稅の體系を論ず・・・・・・・・・・法學博士　神戸正雄

說苑

リッケルトの價値體系・・・・・・・・・・文學博士　米田庄太郎

舊尾張藩に於ける地割制度・・・・・・・・・・農學士　奧田彧

雜錄

「戰前戰後に於ける國富統計」を讀みて・・・・・・・・・・法學士　汐見三郎

說苑

# リツケルトの價値體系（二）

米田庄太郎

第一節　「開かれた體系」
第二節　完全終結の三階段　（前號既載）
第三節　靜觀と活動及び物件と人格　（前號既載）
第四節　六つの價値範域　（本號所載）
第五節　學問と世界觀　（次號掲載）

## 第四節　六つの價値範域

**靜觀的文化財と完全終結の三階段**　今前二節に於て論述せる、二種の分類說を結合して考へると、六つの價値範域が區別される。先づ靜觀的物件的及び不社會的文化財の部類を、完全終結の三階段に結び付けて考へると、學問は此の部類の文化財の一にして、不終結的總體の階段或は將來財に屬するものなることが覺られる。

（1）**學問**　夫れ學問的態度は靜觀に屬するものなること、學問は人格者に非らずして一の物件

であること、又學問の社會的生活に對する重要は、如何に大なるにせよ、學問に固着する特有價値、卽ち眞理は其の純粹性に於ては、社會的として妥當するものでない故に、學問は不社會的財に數へらる可きものなること等は、明白に理解される。若し或物が眞理である可くは、夫れは社會が存在するや否やに頓着なく、眞理である可きである。然るに婚姻とか家族とか國家とか云ふが如き倫理的財は、概念的にさへも社會的生活から離さる可きでない。夫れ故に其の價値は又、社會的價値と云はる可きである。更に完全終結の三階段の上から考へると、學問は吾人の體驗の內容となり得る總てのものを考察し、之を認識せんと努めるものにして、夫れはつまり一の盡さる處なき材料の前に立ち、其の一元主義的傾向は、其の材料に對して、決して完全なる終結に達することが出來ないのであるから、學問は又不終結的總體の範域に屬し、將來財の中に數へらる可きものであることは、明らかである。

學問が完全終結性を缺いて居ると云ふことは、其の論理的基礎に於て、既に明白に現はれて居るのである。學問の一元主義的傾向に對して、本來學問の本質に屬するものと認められ、而して理論的範域に於ては、決して統一されることの出來ない二つの二元性が、對立して居る。夫れは形式と內容との對立と、主觀と客觀との對立とである。確かに先づ形式と質料との結合は、一の理論的「對象」を與へる。併し眞理の附着する總ての學問的識見は、形式と內容との相屬性を肯定する、一の判斷の形態を必然的にとる。而して其の中に同時に一の二元性が存する。是れ質料と形式とは、まさしく相屬的なものとして肯定される爲めに、又離れたものとして、考へられねばな

らぬからである。「概念」は只見掛上統一を示すだけである。と云ふのは、概念は只其の意味に於て、一の判斷に論理的に均等であり得る限りに於て、此くて同樣に形式と內容との相屬性を表現する限りに於て、眞理を保有するからである。而して此の形式と內容との緊張と同樣に、主觀と客觀との二元性は、又學問に於ては決して除去されないのである。主觀は若し一般に、客觀的に認識す可きものならば、常に已れから獨立する客觀に對立せねばならぬ。此くて理論的靜觀は、又此の關係に於ても、決して一の完全なる終結に達することなく、夫れが把捉せんと努力する材料から、特異な仕方にて離れて居る。

學問の外に、尙ほ不終結的總體或は將來財の中に、靜觀的、非人格的及び不社會的範域に屬する他の構成物が存在するか、或は考へ得られるかと云ふ問題は、此處には論ぜずに置いてもよいと思ふ。此處に肝要なるは只學問的生活を體系中に排置し、之を第一の完全終結階段の、歷史的に與へられたる實例として、理解すると云ふことだけである。以下の論述に於ても、吾人が體系の展開に於て引き入れる文化財はヤハリ、只實例と見做さる可きである。

（2）藝術　次に余輩は先づ、靜觀の方面に於て、判斷する學問以上に超出するものは、何であるかを考へて見よう。但し此處に完全終結が達せられる爲めには、一切の緊張が除去されねばならぬが、併し余輩は暫らく、形式と內容との關係に附てのみ、考へることゝする。今余輩は其の諸要素が相屬的なるものとしてさへも、相互に離されない處の、靜觀の一對象を考へることが出來る。吾人若し一の事物に對して、判斷的ではなく、直觀的な態度をとるならば、吾人は夫れが

形式と內容とから、成立すると云ふことに付て、何物をも知らない。只其の理論的反省に對してのみ此二元性が存立するのである。直觀的主觀は直接に一の統一を體驗し、而してまさしく其の統一の體驗に於て、價値が存立するのである。此處では總ての問題や、疑問の不安や、更に相屬性の承認さへも消失する。此くて吾人は論理的價値とは異なれる價値を實現する財に接する。而して其の實現にありては、若し靜觀が總體を占有せんとしないならば、何等の困難も起らない。其の實現によりて靜觀は完全終結的特殊に達するのである。

此處に其の一例を文化生活に於て求めるならば、吾人は藝術作品に於て之を見出す。此の財も亦學問の如く、人格者の社會的生活に對して、時々如何に重要であつても、啻に靜觀的範域に屬するのみならず、更に又非人格的及び不社會的範域に屬する。しかも夫れ自身を越へて、將來を指示しない。夫れは現在の瞬間に對して、其の完全なる意義を有する。實に吾人が完全終結として理解するものは、多くの人々にありては、まさしく審美的價値と同一視されるであらう。藝術的形式は體驗內容の一片を、餘他の世界との結合から、此くて總ての進步する發達から引き離して、包括するのである、此くて藝術作品は、完全に終結されたる部分として、夫れ自身に於て安住するのである。

審美的判斷は形式と內容との相屬性を、肯定すると考へるのは謬見である。判斷は常に理論的のものである。されば嚴密に云はゞ、審美的判斷なるものは存在しない。人々が然か稱するものは、實は審美的價値に關する一の理論的判斷である。而して此の理論的判斷に於ては、確かに形

式と內容とは離れて現はれる。併し是によりて吾はまさしく、審美的靜觀の範域を去つて居るのである。理論的に考ふれば、審美的價値も亦「規範」の形態をとり、自から緊張を起す。されど審美的狀態其物は、かゝる當爲を知らない。規範は妥當する、併し夫れは沈默する。此くて吾人は先づ論理的價値と藝術的價値とを分ち、之を組織的に整へることが出來る。要するに兩者は靜觀的、非人格的及び不社會的なるものゝ範域に屬するが、併し一は不終結的全體に附着し、他は完全終結的特殊に附着するのである。

（3）**汎神教**　されど夫れだけで、此の系列は完結しない。此處に此の系列の第三階段も亦、歷史的文化の構成物を特質附けるに、適するものでないかと云ふ問題が起る。今藝術に於ては、形式と內容との二元性は征服されたが、併しまだ主觀と客觀との二元性は殘つて居る。是れ只吾人が藝術作品を客觀として、吾人に對立させる時にのみ、吾人は之れに對して、一の純審美的態度をとるのであるからである。併し此の對立は特殊的完全終結を攪亂しない。蓋し夫れは只客觀に關するだけで、主觀は云はゞ忘れられて居るからである。されど靜觀の最高階段に於て、總體が把捉さる可くは、統一は總ての關係に於て實現され、此くて終結的或は有限的主觀も亦、全一の中に沒入せねばならないのである。

時としては學問が、此の完全終結に達すると信ずる。夫れは學問が、世界の本質は悟性に於てゞはなく、只直覺に於てのみ、啓示されると敎へる時である。併しかゝる「世界觀」は認識として不確實なものである。此處に一層重要なるは、一種の宗敎の歷史的事實である。而して其の適例

は徹底的神秘主義に於て、恐くは佛教に於て見られるであらう。此處では世界は其の總體に於て主觀も亦全然「一切」の中に沒入する樣に、靜觀的に把捉されることが要求される。總ての二元性は除去せられ、總てが只一の神である。汎神教に於て、啻に一元主義が其の完全終結を見出すのみならず、又價値の非人格的及び不社會的性質は、完全終結總體の此の範域に於て、最も純粹に表現される。箇人は無である。箇人の共同生活は最早一人と他人との何等の關係をも示さず。我は汝であり、汝は我である。一切の多、隨ふて少なくも二人を前定する各社會的要素は、「全一」の中に消へる。「世界」は否定され、神のみが一切である。

此くて歷史的文化生活の示す靜觀の三つの、相異なれる主要なる種類が、夫れに應ずる財及び價値と共に、價値體系に於ける階段として定置される。總て他のものは、吾人が此處に看過す可き人格的、社會的及び活動的要素が入り込まない限り、右の三典型の混合形體として解さる可きである。實に此の論理的、審美的及び神秘的價値の秩序は、啻に事實上存在する靜觀的、非人格的及び不社會的生活を包攝し盡くすのみならず、同時に又今後の文化發達が、機に應じて齎らす其の生活の後の種類も、少なくも必然的價値が之れに附着する限り、其の秩序の中に取り込まれ得ることを、保證するのである。蓋し吾人は完全終結の傾向の見地の下に於ては、其等の三つの範域が相互に異なれると同樣に、其等三つの範域から異なる一の範域が、如何にして成立す可きかを、考へ得ないからである。されば吾人は此の方面を去つて、活動の人格的、社會的財の考究に轉じたいと思ふ。

**活動的文化財と完全終結の三階段**　今活動的、人格的、及び社會的文化財の範域に於ても亦、眞に妥當的な價値の存することを、承認しない哲學者は多いかも知れぬ。哲學の本質は靜觀或は思索であるが故に、生活の哲學的意義は、只靜觀其の物に於てのみ、見出され得ると信ずる人々が多い。徹底的神秘主義者は、只彼等の靜觀の種類のみを正當と考へ、而して夫れ故に只永久財にのみ價値を認め、或は學問及び藝術に於て、精々の處で、全一神の「直見」に達する途の前階段を認めんとするに止める。併し吾人は特殊的價値に對するかゝる態度に就ては、此處に敢て論じやうとはしない。夫れは世界觀の仕事である。吾人は此處では、一の出來るだけ完全な價値體系を求めるのである。而して夫れ故に世界觀に最も廣き基礎を與へる爲めに、又活動的、人格的及び社會的範域をも公平に承認せねばならぬと考へるのである。

（4）**社會的倫理**　今文化は學問生活、藝術生活、倫理生活及び宗教生活等の四部類に分たれることを考へると、吾人は右に論ぜし處の、完全終結の三階段に對して、尙ほ全く地位を與へられて居ない、財の一部類のあることが覺られる。夫れは倫理財である。倫理財は如何なる範域に屬するか。倫理的生活の概念は、學問及び藝術の生活や、又は神秘主義的及び汎神教的宗教の生活の如く、容易に決定さる可きものでない。余輩は此處では只倫理的財は人格者であること、及び倫理的生活は靜觀でないことを前定するが故に、まさしく人格者の活動に限りて、之を考察し得ることを、一般的に承認するに止める。余輩は此處では只倫理學が實際哲學として、行爲する人間を對象とする限りに於て、倫理學を論ずるのである。併し何が活動する人格者に、特に倫理的

な性質を與へるか。此の問題によりて、吾人は此處に解決されることの出來ない、多數の問題に觸れてくる。夫れに拘らず、倫理的價値に對して、體系内に於ける一定の地位を與へんと欲するならば、吾人は先づ必ず倫理的世界に屬する一範域（ゲビート）、卽ち「法則」に自由に服從する、自律的な、人格者の義務を意識する意志を摑み出さねばならぬ。恐らくは此の如くにして生起する倫理財の概念は、あまり狹いかも知れぬ。しかも之れによりて吾人は確かに、文化生活に於て事實上存在し、又吾人の體系中に排列さる可き價値の附着する、一範域を決定するのである。

併し吾人は此處に止まることは出來ない。吾人の右の如くにして得たる價値概念は、あまりに狹く見え得るが、他の關係に於ては、又夫れはあまりに廣いのである。總ての財の實現は義務として現はれ得る。卽ち學問人及び藝術人も亦、若し眞理の爲めに眞理を求め、美の爲めに美を求めるならば、任意的に規範に從ひ、一の自律的意志を有つて居る。是れ世界觀論に對しては、甚だ重要なる一の事情であるが、しかも吾人は此處で之を詳しく論究する暇を有しない。此處では吾人は只、特に倫理的な意志を詳しく決定するだけに、止めざるを得ないのである。吾人は是れまでに人格者及び活動に付て論じたが、併し社會的要素は看過した。されば自律の概念はあまりに廣すぎる樣に見えた。自由意志は又非人格的、靜觀的生活の不社會的財にも、結び付き得るのである。然るに之れに反して吾人は倫理を社會倫理として解するならば、卽ち義務意識は只價値一般の實現に向けられるだけでなく、社會生活に於ける自律的人格の實現に、向けられるものな

るを考へるならば、吾人は是れまでに論ぜし財及び價値と、鋭く區別される財及び價値の一新範域に、達するのである。而して吾人は此の新範域に對して、體系内に一定の地位を與へねばならぬ。

今活動的人格者の總ての結合に於て、吾人が「慣習」と稱する或物が作られる。卽ち社會の各成員に對して、一定の生活形式が强要される。而して之れによりて箇人は、社會的に結び付けられるのである。併し夫れが只本能的に實行される以上は、夫れは尙ほ吾人に何等の興味をも起させない。されど人間が慣習に對して意識的態度をとり、或物を明らかに正當として認め、他の物を排斥するならば、此くて其の拘束に付て自由に判斷する爲めに、社會に對して獨立なる態度をとるならば、其の時に社會的生活に於ける義務的なるものゝ自律的承認として、「倫理」が生起するのである。倫理は行爲が依て以て生起し、人間の共同生活に對して重要を有する一の意志狀態である。而して倫理は又明らかに反社會的性質を帶びることが出來るが、しかも夫れが爲めに社會的性質を減損しない。此の意味にて倫理的價値の附着する財は、常に社會的結合の中に立つがまゝの人格者其物である。而して之を財にする價値は、社會内の自由或は社會的自律である。併し倫理財にありては、明らかに啻に箇々の人格者が取扱はれるだけでなく、同樣に又諸社會も取扱はれる。全社會生活は、自由な、自律的な人格者の發達を促進すると云ふ、見地の下に置かれねばならぬ。而して其の見地からして、婚姻、家族、國家、民族、文化、人類等の諸團結が、其の倫理的意義に於て理解さる可きである。但し吾人は人々が吾人の倫理的なるものゝ概念が、あまりに狹いと考へ

る場合あるを慮りて、其等の財に附着する價値を、特に社會倫理的價値と稱したいと思ふ。確かに此の如くにして、吾人の目的の爲めに、一の範域が充分に限定されるのである。而して社會倫理的傾向は、何處にありても、卽ち私的生活にありても、亦公的生活にありても、自由なる人格者、自己の行爲の多種多樣に於て自律的意志によりて規定される箇人を、發達させることを目的とするのである。されば又性的、經濟的、法律的、政治的、民族的生活の社會的諸制度は、夫れが人格者に自律を與へると云ふ樣に、或は其の內容が如何に多種多樣であるとも、夫れが人格的自由の形式によりて財とされる樣に、形成さる可きである。

今吾人が此處に價値體系の爲めに呈出す可き問題は、社會倫理的範域に於て、完全終結が達し得られるかと云ふことである。而して總體に對する努力は、此處にも亦完全終結に反對することは、明らかに認められる。此處では理論的靜觀に於ける如く、形成さる可き體驗內容の全體が取扱はれるのでなく、倫理的に種々異なれる宇宙は無盡藏のものである。人格の完全終結の多元主義的原理に從ふて、各人は其の箇性及び特殊性に於て、倫理に關しては同樣に重要である。吾人は各箇人が、絕對的に自律的となり得ることを認めんと欲するも、夫れは普遍的な倫理的完全終結の傾向を規定しないであらう。此處に人格の社會結合が肝要である。而して此の結合に於て、總て自律的になる可く敎育さる可き、新しき人間が絕へず生れる。常に新しき關係が生じ、社會的自由に關して新しき困難が起る。されば箇々の人格者の全體、及び同じく社會的制度は、夫れは各箇人の特殊性に應ずる社會的自律を之れに保證すると云ふ意味にて、決して倫理的に完全に

終結されないであらう。此處にザインとゾルレンとの間の緊張の調和は、達せらる可きでない。されば倫理的財は學問の如く、將來財の一にして不終結的總體に屬するものである。

吾人は實に理論的なるものに於けると同じく、倫理的なるもの其のものゝ本質に於て、一定の緊張を指示することが出來る。若し中心的倫理財は義務を意識する人格者であるならば、倫理的財からゾルレンは決して消失す可きものでない。規範を承認しなければ、最早自律の意味に於ける自由は全く存在しない。此くて社會的自由も亦全く存在しない。社會倫理財にありては、本來夫れに附着する一の反對によりて、夫れは完全終結性を缺くと云ふことが必然的に結び付いて居る。總ての人々は倫理的である可きである。しかも吾人は只自由が、尙ほ總ての關係に於て達せられない限りに於てのみ、倫理的である。財の活動的、人格的及び社會方面に於ける、此の不終結的總體の範域は、ゾルレンのゾルレンによりて支配されるのである。

（5）**純人格的現在生活財**　右に述べし如く、社會倫理的生活は、其の價値を以て價値體系中に編入されるのであるが、夫れと同時に又完全終結の傾向は、此の範域以上に超出するのである。併し夫れが爲めに倫理的なるものは、かの理論的なるものが將來財中に編入されることによりて、其の重要を減損しないと同樣に、其の重要を減損しないことは明らかである。總體に向ふて息みなく前進する不終結的發達の思想は、寧ろ兩者に於て其の毀損さる可からざる偉大を保有する。しかも吾人は夫れが爲めに、此の思想の限界を看過してはならぬ。吾人が一切の人格的生活は、只現在に於てのみ眞實に生きて居る事を考へるや否や、夫れ故に倫理財は將來を持續的に指示

することによりて、其の最とも內部的なる本質に於ては、不確實である可きものなるを考へるや否や、其の限界は最も明白に現はれねばならぬ。人格的生活は常に只他の或物の爲めに存在し、而して此の他の或物も矢張り、夫れが夫れ自身に於て安住する生活に達する樣には、決して實現され得ないものであるとするも、吾人は只超人格的生活の爲めに、働いて居るのであると云ふことのみを考へる時には、吾人が全然將來の爲めに己を供すると云ふ意識は、大に吾人を高め得るのである。併し之れと異りて、吾人が只人格者其物に付てのみ考へる時は、人格者の存在に於ては、總てが只前階段であるに過ぎないと云ふ思想は、到底堪へ得られなくなる。されば靜觀的方面に於けるとは、全く意味を異にするが、矢張り眞に一の完全なる終結に達する一の範域、活動的、社會的人間の現在生活も亦、夫れ自身に其の意義を與へられたる一の範域の必要なることが認められてくる。而して之れによりて吾人は、再び完全終結の一新階段に達するのである。

併し其の新階段に、如何なる名稱が與へらる可きかを問ふと、哲學は今日までに發達した儘では、此處に吾人を見棄てるのである。確かに「義務を意識する意志」の概念は、吾人の生活の意義を滿足に闡明し得ないと云ふことは、既に屢々云はれた。併し其の爲めに倫理學を責めるは正當でない。吾人は自律を其の中心概念として、之れには手を觸れずに置き、而して其の代りに、只倫理的價値のみを以て、人格的及び活動的存在の意義闡明を完成することが、果して可能であるや否やと云ふ問題を、愈々斷乎として呈出す可きである。又吾人は此の問題に付て、只審美的或は神秘的價値を引き合ひに出すだけに止まつてはならぬ。是れ其等の價値は非人格的及び靜觀的

範域内に存在するからである。吾人は寧ろ此處に、普通の哲學的型の中にはまり込まぬ財及び價値が、あることを觀破せねばならぬ。吾人は明らかに活動的及び人格的生活に屬する總てを、倫理的と稱することも出來る。併し夫れは適當でない。是れ吾人は理論的價値と審美的價値とが、相異なれると同樣に、相互に異なれる二種の價値を、同じ一語で云ひ表はすことになるからである。吾人は概念的には、確かに人格的現在生活の財を、社會倫理的將來財から、區別せねばならぬ。人格的現在生活の財は、完全終結的特殊として、終りなき文化發達の流れの中にありて、宛も大河の中に安坐する島嶼の如くに、現はれるのであるが、しかも夫れが爲めに藝術品とならねば、又超越的無時間的なるものゝ一ともならない。而して此の事實が人格的現在生活の財を鋭く特質附け、他の財との混同を防ぐのである。

併し吾人は此處に、只吾人の體系の原理を愛するのあまり、之れに應ずる何等の實在も存在しない、一の範域を作つたのではあるまいか。此の問題に對する答は、此處に必要なる簡單明瞭を以ては容易に與へ得られるものでない。確かに完全終結的なる人格的現在生活の概念中に、多種多樣な事實が包攝される。而して其等の事實は、まさしく其の豐富なるが爲めに、吾人之を統一的に特質附けることは困難である。而して只價値體系の完成のみを問題とする本論文に於ては、余輩は之を企だてることが出來ない。されば余輩は此處に、只一般的に此の問題の存立することを、確かめる可き數例を擧げるに止める。

**實例**　今狹義の社會的なるものを考察すると、吾人は家族内に於て展開する多くの關係を考へ

ることが出來る。確かに男女の關係や、親子の關係も亦義務によりて規制され、社會倫理的自由の爲めに役立つ。併し吾人は家族生活を、只此の見地の下に於て評價するだけでよいか。其の場合には、吾人は母と云ふことが何を意味し、又母は其の子に對して何であり得るかを、決して充分に理解しないであらう。母と云ふことは、只將來の發達に對して、重要であるだけに止まらない一の價値である。其の價値の附着する社會的結合は、寧ろ全く一の夫れ自身で充足し、夫れ自身に基づく現在生活の性質を有する。而して全く同じ事は、吾人が愛、親切、友誼、社交性等の名稱を與へる總ての關係、即ち私的及び親密的生活に於て、甚だ重要なる役目を演ずる其等の社會財に就ても、云ひ得られる。家庭の內外に於ける異性或は同性の人々の諸關係、成人と成人との關係、小供と小供との關係、或は成人と小供との關係等が取扱はれるに應じて、實に多種多樣の財が現はれる。而して總て其等のものは重要である爲めに、一の系列中に編入され、排置されるを要しない處の生きたる瞬間を完全に成就し、夫れに吾人の人格的、活動的、社會的存在の意義の大なる部分が、附着するのである。更に此の範域に於て又、反社會的關係が著しき重要を獲得する。吾人は吾人自身に返る爲めには、總ての「社會」を避ける。而して吾人は其の時に、憧憬及び充實に於て、眞に全く獨りであり得る。或は一友人の胸底を洞察する如くに、自然の胸底を洞察する爲めに、只自然とのみ共にあり得る。又此の場合に、吾人が故鄉に於て又は異鄉に於て、動植物の生動と關係を結ぶか、或は自我が「宇宙的」に擴大する時に星の空を眺める場合の如くに、「死せる自然」と關係を結ぶかに應じて、財の大なる富が展開する。各人は其の夫れ自身に基づけ

る價値を具へる孤獨或は寂寞の、かゝる瞬時を熟知する。而して吾人は其の意義を、普通の型の一の中に推し込むことが出來るか。恐らくは宗教的諸要素が、其等の瞬時の中に發動して居よう。併し夫れだけて、其等の瞬時の本質は盡くされない。之れと同じく、包括的な社會的團體に附着する意義を、是れまでに擧げたる價値に、殘りなく還元することは出來ないであらう。此くて民族は夫れが政治的生活と結合する以上、確かに一の社會倫理的財である。併し夫れは同時に其の意義に於て、遙かに國家以上に達する。民族の集團的人格性は、箇々の箇性の如く、歷史的發達進行に於ける單なる階段として、編入され排置されるを許さない財である。

確かに、夫れは何に基因するかを言明するは容易でない。併し最とも相異なれる種類の箇別的人格生活が、其の特殊な樣式（シチル）、其の夫れ自身に於て有する調子（ゾロヂー）、其の無類の韻律（リヴムス）を現示する事、又夫れによりて其の存在を完全に正當ならしめ、「何の爲めに」と云ふ總ての問題を排斥することに、特に注目する時には、吾人は今此處に考へる處のものを發見する。而して其の時には、吾人は現在に於ける完全終結を特質附ける爲めに、審美的範域から比喩を借りて之を把捉するのであるが、是れはまさしく此の關係に於て、吾人のしてはならない事である。蓋し完全終結的特殊の両階段は、例へば彼等の規範は沈默し、而して只理論的反省に對してのみ、ゾルレンとして意識に現はれると云ふが如き事實に於て、相互に近緣を有する特徵を確かに表示するが、夫れに拘らず、吾人が今日前に見る生活の諸形態は、一切の審美的形態から嚴格に區別されることが、必要であるからである。然らざれば吾人は之を、「美はしき魂」の概念か、又は此の概念と近緣を有す

る靜觀的審美主義の如き概念の中に、攝取するであらう。併し吾人は此處にかゝる混同に陷らない樣に、特に注意を拂はねばならないのである。吾人が完全に終結せる現在生活を、一の特殊なる範域として限定する時に、吾人の取扱ふ可きは、吾人の考察が暫時附着し、而して社會的意欲及び行動より吾人を切り離す處の、一の實質的調和ではなくして、只人格的活動的及び社會的存在の價値だけである。而して此處では吾人は其他何處に於てよりもよりよく、此の完全終結的特殊性を表示する爲めに、「生活價値」と云ふ語を用ひ得るとしても、しかも吾人は、生活は單に生活としては價値無關係のものにして、隨ふて生活價値と云ふ語を避けるがよいと云ふことを決して忘れてはならぬ。

**人格的現在生活財の哲學的考察の必要**　とにかく以上述べし處によりて、今や人格的存在の完全に終結されたる現在に附着する價値は、吾人の生活意義の意明に於て、必要缺くべからざるものなること、而して夫れ故に又價値體系に於て、正當に其の地位を要求するものなることは、明白であると思ふ。併し哲學者が是れまで其等の價値を殆んど全く無視し、或は他の價値と混同して居た事には、種々なる理由がある。其の一は價値の此の範域に於ては、著しく目に立たない、日常の、些細な事物が取扱はれて居ることである。其等の價値は吾人の注意を惹かぬ程、自明なものである。其等の價値は確かに分量的には、各箇人の生活に於て、多くの人々にありては日々に一の重大なる役目を演ずるものである。併し恐らくはまさしく夫れが爲めに、人々は其等の價値を以て、哲學的考察の對象とする値はないと考へて居ると思ふ。學問、藝術、宗教等の所謂大事

件は又倫理の問題も矢張り、强く各人の注意を惹起する。是れ其等のものゝ命ずる義務は、生活の嚴肅を訓戒的に吾人に示すからである。然るに特殊的な人格的現在完成は、其の平明な靜かさに於て偉大を缺き、否な一部分は嚴肅さへも缺いて居る樣に見える。少なくも其等の價値の或物は全然平凡な、通俗的な性質を有つて居るのでないか。哲學は吾人を日常生活の上に、高めるものと云はれて居る。されば哲學が、單なる現在的完成から遠ざかるのは正當である。

吾人は右の如くに考へることが出來るが、併し夫れに拘らず、眞に包括的な世界觀を立てんとするに當ては、只神聖人や、倫理的英雄や、戰爭的英雄や、學問及び藝術の天才等、一言に云はゞ例外的な、非凡な人物の意義を決定するものを、考察するだけに限らんとするは、不合理である。平均人も亦哲學上意味を有する。而して哲學は分量的廣がりに於て、又多くの場合には根本的にすら、生活の意義が依て以て實現される處のものを、全く看過するを許されないのである。

恐らくは右の事實の認識を困難ならしむるもの、又同じく人々が屢々其等の財を、其の特質に於て見落すことを助長するものは、人格的、活動的、社會的生活の全範域に對して重要なる、一の事情に基づくと思はれる。夫れは此の生活範域に於ては、人格的統合(Personal-Union)の原理と稱すべきものが行なはれて居ると云ふことである、靜觀的、不人格的及び不社會的方面に於ては種々なる價値は啻に概念的に、區別される可きものであるのみならず、又事實上相異なれる財に附着する。論理的意義の結び付けられる實在が、同時に審美的價値の運載者であることは稀れであるが、併し活動的、人格的及び社會的生活に於ては、事情は大に異なつて居る。此處では種

種なる價値の種類が、同一の人格者に於て見出されるのである。さはれ此の事情は、其等の價値の概念的區別の必要を、決してなくするものでない。之れに反して、吾人若し吾人の生活の意義に付て、明瞭なる理解を得んとするならば、吾人はまさしく、事實上、常に相互に結合されて居るものを、最も嚴格に區別して、以て其の差異を看過しない樣に、努めねばならぬ。而して其の時に始めて、人格的生活の種々なる價値範域間に生起し得る衝突、殊に倫理的義務と、完全に終結されたる現在生活の財との間に、起らずには濟まない衝突も亦、其の眞義に於て評價されるのである。

**女性の意義**　併し此處に起る總ての問題を、詳しく考究することは出來ない。只一般的に一の特異な價値範域の、存在することだけが、示さるればよいのである。而して其の範域の根本的重要を明らかにする爲めに、吾人は終りに尙ほ、一定の關係に於ては、既に純現在財以上に達し、此くて價値體系の調整に對しても、重要なる意味を有する或物を指示したいと思ふ。疑ひもなく一の人間生活の人格的意義は、より多く將來財及び之れに於ける無終の働きによりて決定され、他の人間生活の意義は、より多く現在財、及び其の完全終結によりて決定される。而して此の點に關して公平なる觀察者にありては、又性の差別が認められねばならぬ。確かに各箇人に於て、女子に於ても男子に於けると同樣に、社會的倫理的要求が呈出さる可きである。併し吾人は、種々なる例外のあるに拘らず、男子の本質は一般により多く、殊に公的生活に於ける將來の爲めの働きに向けられ、女子の本質はより多く、現在生活の爲めの働きに向けられることを、忘れては

ならぬ。されば只一の偏局的な道德的發達狂及び進步狂のみが、女子の價値を少なく評定し得るのである。人若し現在財を其の根本的重要に於て、夫れ自身に於て立てられる一の人間生活に對して、避け得られないものとして、完全終結の傾向から理解したならば、まさしく女子の特質に男子の特質と同等に高き地位を、存在の全體意義に於て、認めることが出來るのである。但し歷史的に發達する公的文化の爲めの働きは、主として男子によりて、遂行されることは否まれない。「女性（ヴァ・ヴリヒカイト）」と云ふことは、夫れはゾルレンとして意識に上されるを要する程のものでないが、とにかく生活が「女性」の形式をとる時には、人格的現在財の範域に於ける、一の全く特殊なる重要價値となる。此の事は屢々立てられる左の如き差別、卽ち女子は「ある」處のものによりてより多く、男子は「なす」處のものによりてより多く、意義を有するとか、女子は男子よりもより多く自然に接近し、より多く狀態的な實在にして、より少なく作業的な實在であり、より多く主觀的にしてより少なく客觀的であると云ふが如き差別と、決して混同されてはならぬ。現在に於ける人格的完全終結に於ても、矢張り作業、活動、或は少なくも夫れは總ての單なる自然以上に、遙かに上ると云ふ意味での、客觀的「文化の仕事」が取扱はれて居るのである。併し又確かに全く特殊な種類の一の活動及び一の文化の仕事、卽ち啻に歷史的發達に於ける階段であるだけなく、更に一切の歷史の上に出でゝ、夫れ自身に於て完全なる終結に達する作業が、取扱はれて居るのである。

**戀愛の意義**　此の見地からして又、吾人は恐らくは、生活の意義に對する戀愛の重要をも評價し、財の體系に於ける其の地位を決定することを望み得るのである。戀愛に於ては、一の特異な

完成價値が附着する。此處には明らかに、自然的衝動は問題とならない。是れ自然的衝動は、總ての單に自然的なるものゝ如く、價値無關係であるからである。尙ほ生殖の爲めの愛の重要も、此處では問題でない。是れ此の見地の下では、愛は一定の目的の爲めの手段に引き下げられ、決して其の特有の價値に於て、對象財として解し得られないからである。同樣に愛の社會倫理的重要も全く看過さる可きである。此くて戀愛と婚姻形式との關係も、矢張り問題とならないのである。而して又恐らくは戀愛に與へられる宗教的淨化も、此處では看過さる可きである。此處では只夫れ自身に於て立つが如き、箇性化されたる人格的生活關係の意義のみが究明さる可く、而して此の意義を究明する爲めに、終りなき將來の爲めの働きと、現在の完成との關係が重要となるのである。將來の爲めの働きも亦現在の完成も、共に吾人の感覺的存在に屬し、而して兩者の何れも、夫れ自身に於て他から切り離して考へられると、偏局的なものとなる。そこで完成され難き將來の爲めの働きに、殆んど全く己を獻げ、而して夫れが爲めに屢々苦痛に惱まされる男子は、現在に於て己れ自身及び己れの仕事を完成し得る女子との、考へ得られるだけ最とも親密なる感覺的精神的共同生活によりて、不終結的總體に對する努力を放棄するを要せずして、己れ自身の存在の完全終結を體驗することが出來るのであり、又之れに反して、自己の終結的現在生活を恐らくは狹隘と感ずる女子は、男子及び其の仕事に於て、己れの本質の完全に終結されたる現在性を損傷することなしに、一の解放的な將來の眺望を獲得することが出來るのである。此處に只茫だ簡單に指示され得るだけの此の道に於て、吾人は又男女相合して始めて完全なる人間を作ると

云ふ、屢々唱道される思想の眞義を會得し、又「人道」の理想は、男性及び女性と云ふことを、全く人間の「覆ひ物」に過ぎないものゝ如くに見做し、只男女に通ずる同樣な性質にのみ注目して立てらる可きものでなく、完全終結が本質的に相異なり、又其の差異によりて、相互に他に依存する處の、二つのものゝ合致に於て求めらる可きものであることを、理解するであらう。此の基礎の上に立つ両性の關係に於て、人格的價値の二つの始めの階段の一總合が存立する限り、戀愛の原理は完全に終結される人格的現在生活の、最高價値として認めらる可きものである。

**一神教**　併し夫れと同時に又、總合の思想は尙ほ夫れ以上に吾人を導く。靜觀的方面に於ける如く、此處にも亦始めの二階段の短所を除いて、其の長所を合する第三階段の眺望が開かれる。而して「地上」の愛は、現在と將來とを結合するに拘らず、尙ほ此の階段を表現しないと云ふことは、始めから明白である。尙ほ愛以外の、人格者の完成される現在生活の他の財にありても、同樣である。是れ此等の財に於ても、矢張り人格的宇宙全體との必然的結合が缺けて居るからである。此の階段はつまり活動的、人格的及び社會的生活の範域に於ける完全終結の最後の階段、卽ち完全終結的總體の階段である可きものである。要するに吾人は此處に、人格的系列の終局を如何に考ふ可きかと云ふ問題に達したのである。是れ價値體系の考究に於て、吾人の呈出せねばならぬ最後の問題にして、吾人は此の問題の解決を企だてることによりて、先づ大體上價値體系問題を考究し了つたと、考へることが出來るのである。

余輩は此處に、靜觀の諸階段との比較によりて、活動の最後の階段を考へて見よう。靜觀的方

面に於ては、一元主義的完全終結の傾向は、先づ形式と內容との二元性、次に主觀と客觀との二元性を越へて全一に推し上るのであるが、今活動的方面に於ても、完全終結的特殊性の階段は、先づ自律的なる倫理的當爲の緊張を解除した。併し箇人的生活の多樣は、夫れによりて只高められたるだけである。此處で各箇人は其の特殊的完全終結を、各自の特殊なる仕方にて行なふ。此處に吾人は多元主義の範域に入るが又其の中に止まらなければならぬ。されば活動の方面にありては、其の最高階段に立つ完全終結的總體も、汎神敎の神の如くに、箇人的生活の豐富を滅却するが如き一の「全體」に、形成されることは出來ないのである。而して此の最後の階段は、必然的に左の二事を指示するのである。一は此處では主觀が客觀中に、全く沒入することが出來ないから、寧ろ絕對的主觀完全終結の理想（ein Ideal absoluter Subjekts-Voll-Endung）が構成さるゝ可きこと、乃ち汎神敎の代りに、一の人格神の信仰が立てらる可きこと、更に又此の一人格神に對して、箇々の人格者或は「靈魂」の多數性が完全に保持さる可きことである。二は之れによりて、活動の方面の價値體系に於ても、吾人は結局宗敎に到着すると云ふことである。而して是れは必然的であると思ふ。是れ靜觀の方面に於ては、吾人は只汎神敎を確立し得たゞけであるから、此處に活動の方面に於て、他の宗敎的價値が其地位を見出さねばならぬからである。靜觀的、非人格的及び不社會的系列の終極としての信仰は、一元主義的傾向を以て、必然的に世界否定に達したとすれば、無數の箇人の人格的生活が夫れ夫れ完全に終結さる可き此の場合に於ては、只人格的及び社會的活動の多樣、豐富の肯定のみが、取扱はれることを要する。確かに此處では神と

世界とは、相離れて存立する。而して両者は親密なる結合をなすに於ても、矢張り別れて居らねばならぬ。完全終結的な總體的人格者（die voll-endliche Total-Persönlichkeit）としての神と、主觀との關係は、主觀の有限的或は終結的存在を、確かに不完全から救ふが、併し之を神秘的に止揚することは出來ない。之れに反して吾人が愛し、又愛されると信じ得る、人格的超越者或は永久者に、人格的に關與することによりて、吾人は吾人の人格的生活を、其の箇性的豐富に於て、大に高めることが出來る。而して只此くの如くにしてのみ、多元主義的傾向が終結に達するのである。此の宗教は生活が、自己の特殊な力からしては、到底發達させることの出來ない一の價値を、之れに與へることによりて、之を現在及び將來に於て支へ、且つ固めるのである。此くて永久者が時間的なるものゝ中に、神的なるものが人間的なるものゝ中に、絶對者が相對者の中に、完全終結的なるものが不終結的及び有限的なるものゝ中に、人格者の總體性が特殊性の中に移し込まれ、而して夫れは從來の見地の下では、人格的生活に於ける完成されないものとして、或は反意義的なものとしてさへも見做され得たるものにも、價値を與へるであらう。

右に述べし余輩の考への主旨は、明白であると思ふ。云ふまでもなく、一の世界觀に於て、二種の宗教的眞理が並立し得ない。併し余輩は此處では、只種々なる價値を出來るだけ完全に、組織的に調整せんとするだけで、決して宗教的生活の統一的意義闡明を企たてるのでないのである。余輩は何れの宗教が眞理であるかと云ふ問題には全く觸れないで、只一神教の人格的神及び活動的靈魂の豐富が、靜的方面に於ける汎神教と同樣に、余輩の價値體系の型に於て、適當に其の

地位を占める事を確定せんとするだけである。吾人が靜觀的方面に於て見出せる客觀の完全終結的總體と、活動的方面に於ける主觀の完全終結的總體とは、相對應す可きものである。而して前者の場合に於ては、一切の人格的、箇人的、活動的及び社會的生活は、一元主義の貧しき惠福中に沒するが、後者の場合に於ては、其の生活の豐富が多元主義的に、永久者に結び付けられるのである。總ての箇人は人格者として、人格的神に一の人格的關係を有し、此くて其の箇人的特殊性を、完全終結的總體性と結合する。箇人として彼等は、「地上に於ける神の王國」を建設する爲めに努力し、而して夫れによりて有限的箇人よりも、より大なるものとなり得る。終りに社會的要素も亦、一切の無常の上に高められて現はれる。此の豐富の宗教に於ては、神は實に各箇人の我に對して、之れと最も內部的に交通すると認められる處の、一の特殊なる汝として現はれる。神の愛は地上のものを、夫れ自身の中に取り入れ、而して之れに最高の淨化を與へる。總ての點に附て、箇人的、活動的及び社會的關係に於て、信者は有限性の禍から救はれると、信ずることが出來るのである。

右に述べしことによりて、靜觀の最後の階段と同じく、一の宗教的性質を帶ぶるが、而も夫れに拘らず、根本的に異なれる種類の價値を具有する處の、此の活動の最後の階段の特質附けは、充分であらうと思ふ。終りに吾人は其の現實なる文化生活との關係を考へると、歷史的宗教の中で、人格的完全終結の此の理想と、全然一致するものは全く見出されない。併し此の事は、吾人の組

織的結合に對しては重要でない。吾人が圖式的に又は型として引き出し得たる最とも重要なる特徴の或物が、又事實上眼前に存在する一宗教、卽ち基督教に於て、發見されると云ふだけで充分である。實に人々が其の獨立性を保持する箇人的靈魂の多と相並んで、一の人格神の存在するを信ずる何處に於ても、一神教と汎神教との決定的對向は、明らかに現はれて居るのである。更に歷史的諸宗教は、両典型からの諸要素が相結合して成立する構成物として理解さる可きである。例へば基督教的神秘主義は、社會的活動の人格價値が、不社會的靜觀の汎神教的理想と結び付けられる、一の混合形態として理解さる可きである。併し歷史的文化生活を、其の陰影及び濃淡に從ふて、詳しく區別し、組織すると云ふことは、此處では必要でない。此處では只財を、之れに附着する價値の根本的差異に從ふて、調整すると云ふことだけが、吾人の問題であるのである。